

素敵なプログラムをめぐって 奥田佳道

ヴィヴァルディ (1678~1741)

4つのヴァイオリンとチェロのための協奏曲 口短調「調和の靈感」 作品3-10 RV.580

躍動感に満ちた調べも対話も聴き手の喜びとなる。開演を彩るのは「調和の靈感 L'estro Armonico (レストロ・アルモニコ)」の名を持つヴィヴァルディの協奏曲集全12曲から、名作の誉れ高い第10番。ソロとアンサンブルの交替も粋な「4つのヴァイオリン (と一つのチェロ) のための協奏曲」である。バッハもこの合奏協奏曲風のコンチェルトに魅了され「4台のチェンバロのための協奏曲イ短調 BWV.1065」に編曲している。

第1楽章：アレグロ

第2楽章：ラルゴ

第3楽章：アレグロ

ヨハン・セバスティアン・バッハ (1685~1750)

オーボエとヴァイオリンのための協奏曲 ハ短調 BWV.1060

バッハは、この愛すべき協奏曲をライプツィヒの演奏団体「コレギウム・ムジクム」のために書いたようである。あるいはかつて書いた協奏曲を彼らのために編曲・校訂したか……。

大学生や音楽愛好家によって結成されたプロ級のアンサンブル「コレギウム・ムジクム」は、カフェ「ツィマーマン」の店内や庭園で旺盛な演奏活動を行っていた。バッハは音楽面のリーダーだった。ライプツィヒ時代のバッハと言えば、聖トーマス教会との関わりが有名だが、彼は街の有志による合奏団とも交歓していたのである。

このコンチェルト、ハ短調、ニ短調の楽譜のほか、2つのヴァイオリンのための版も出ている。長らく伝えられた形、つまり2台のチェンバロのための協奏曲第1番 BWV.1060として演奏されることもある。

第1楽章：アレグロ

第2楽章：アダージョ

第3楽章：アレグロ

モーツァルト (1756~1791)

2つのヴァイオリンのためのコンチェルトーネ ハ長調 K.190

さてここからは、神に愛されし者、という意味のアマデウスをミドルネームに戴くモーツァルトの音楽を。

1774年5月、モーツァルトが18歳のときに故郷ザルツブルクで紡いだ華やかな作品で、協奏曲と管弦楽曲(ディヴェルティメントなど)の美質をあわせもつ。コンチェルトーネはスケールの大きなコンチェルトという意味になるだろうか。第2楽章ではオーボエとチェロも魅せ場を創る。

第1楽章：アンダンテ・スピリトoso (精神をこめて、元気よく)

第2楽章：アンダンティーノ・グラツィオーソ（優美に）

第3楽章：テンポ・ディ・メヌエット、ヴィヴァーチェ

ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲 変ホ長調 K.364

趣のある序奏から2つのソロ楽器がオクターヴの音程で弾き始める場面の、何と晴れやかなこと。いっぽうアンダンテ、ハ短調で書かれた第2楽章の味わいは、奇蹟。ソロに寄り添うオーケストラも哀感こめて歌い、時空を超えた祈りを捧げるかのよう。第3楽章のオペラティックな躍動感も私たちに高みに導く。

協奏交響曲＝シンフォニア・コンチェルタンテとは、複数のソロ楽器が活躍する協奏曲のことで、バロック期の合奏協奏曲（コンチェルト・グロッソ）の流れをくむ華やきが身上だ。腕自慢の音楽家が顔を揃えていた18世紀中葉のパリ、それにマンハイムで一世を風びしたジャンルである。「ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲」は、モーツァルトの芸術観を飛翔させたといわれる1777年から79年にかけての「マンハイム・パリ旅行」後にザルツブルクで書かれたようである。

鍵盤楽器ばかりでなく、弦楽器の演奏にも通じていたモーツァルトは、独奏ヴィオラにスコルダトゥーラ（イタリア語、直訳すれば調子はずれ）という変則調弦を施す。ヴァイオリンとの二重奏を意識し、ヴィオラの弦を半音高く調弦させたのである。その代わりというのもおかしな言い方だが、原典版では独奏ヴィオラのパートを、このコンチェルタンテの主調である変ホ長調よりも半音下となるニ長調で書いた。しかし調弦を変えることなく、長く使われている普及版の楽譜で弾く演奏家もいる。

第1楽章：アレグロ・マエストーソ（荘厳に）

第2楽章：アンダンテ

第3楽章：プレスト

交響曲第29番 イ長調 K.201

冒頭から優美な調べが、いや奇蹟の旋律がホールを満たす。はつらつとした舞曲風の響きも魅力となる。モーツァルトが1774年春、18歳の時に紡いだ、このイ長調の交響曲を愛する聴き手は、とても多い。故郷ザルツブルク時代の交響曲としては、この作品と1773年に書かれた交響曲第25番ト短調K.183への関心が高い、と評論家風に言うことも可能だ。いずれも、1781年に始まるウィーン時代の傑作群と並び称される佳品である。

交響曲第29番イ長調はモーツァルトにとっても自信作だったようで、ウィーンでも披露している。楽器編成はオーボエ2、ホルン2、それに弦楽。実に控えめなフォーメーションだ。

夢見るような調べに添えられた大胆な跳躍に強弱。付点のリズムも鍵を握る。素晴らしい。楽の音と自在に戯れるアマデウスがここにいる。

ステージに並んだ演奏家たち、そして私たちの想いは、きっと届く。

第1楽章：アレグロ・モデラート

第2楽章：アンダンテ（ヴァイオリンは弱音器をつける）

第3楽章：メヌエット～トリオ（＝中間部）

第4楽章：アレグロ・コン・スピリト（コン・スピリトは元気よく、の意）